

鋼と鋼が交錯し、散った火花は鉄火場の匂いがした。

殺無生^{セツムシヨウ}が己の背筋を、縦に、指先でなぞられるような汗を生じさせたのは数年来の事だ。抜いた刃をまだ収めきれずにいる。双剣を背負っているが、左手の抜刀が精一杯でしかなかった。

足下には、切れず折れ曲がった鋼の矢が転がっている。何処から飛来した矢なのかも分からなかった。ここは室内なのだ、扉も窓も閉め切られている。仮に窓から狙い撃たれた、もしくは壁や扉を貫いてきた、というなら殺無生もここまで取り乱したりはしない。

何もない宙空から沸いて飛来した矢であった。

それは一本ではなく二本だった事も殺無生は理解している。自分目がけて放たれたのが一本だけだと察知し、またそれを咄嗟に叩き

落とすのが精一杯なのも正直な所だ。

残るもう一つの矢は、壁に突き立ってまだ何かを射殺さんと震えている。

「……無事か、掠^{リョウ}？」

「驚いて死ぬかと思ったよ、無生」

飾りの四つぶら下がった、見事な拵えの煙管を優雅に咥えた掠風竊塵^{リョウフウセツジン}は、当たらないと見越したのか身動きも取れなかったのか、どちらとも取れる佇まいで椅子に腰掛けています。少なくとも驚いて死ぬという取り乱し方は一切していない。

掠風竊塵の安否を確認してから初めて、殺無生は周囲を確認した。気配はない。三本目の矢が現れる様子もない。扉の向こうからも、何の物音も聞き取れない。足下に転がったままの、曲がった矢を、殺無生はつま先で蹴り飛ばす。

「……何事だ、これは？ 俺を狙っていたぞ」

「私をもね」

「だがそちらは何もせずとも外れていた。俺に向けられていた矢は違う」

「さて……どこぞの誰かが、剣鬼の名高き殺無生を、大会前に射殺す為に策略を仕掛けたのかな？」

「俺の剣名などたかが知れている。むしろ狙うなら他に最適のがいると思うが」

「……そう言われてみればそうだが、君も中々の高名を持つ」

「そうかな。大体、俺がこのけんぎかい剣技會に参加する事さえ場違いだ。暗殺などより大衆の前で負けて恥を晒させる事を望む者の方が数知れまいよ」

「……しかし君だけが狙われた、というのは早計過ぎないかね？」

「というと？」

「まあ君はこの控え室で待ち給え。私が外の様子を見てくる」

「おい、付き人のお前なら出歩いていいという話ではなかったぞ。開催後の外出禁止令は」

「それは私のやる事だから任せて貰いたい。月明かりを浴びて影を落とさず、雪道を踏んで足跡を残さずと言われた私に。それに大体、

君は余り他人を詮索するのに向いていないよ
うだしね」

「とは言え、気をつけろよ、掠」

「分かっているよ、私も死にたい訳でなし、君
が失格になるのも詰まらない」

掠風竊塵が扉を開けて控え室を出て行くの
を見送り、そしてやっと殺無生は一息短く呼
吸を吐いた。左手の剣を鞘へと戻し、卓に腰
掛けた。

掠風竊塵と知り合ってもう三年ほどになる。
最初の半年は貴様と呼びお前と呼んだ。掠風
竊塵と呼んだのは一年後であったし、掠と呼
ぶようになったのはここ半年の事だ。

最初は、いつもの裏絡みの、用心棒感覚で
組んだだけだ。殺無生はその剣技を、闇の中
でのみ奮っていた。剣に身を捧げ極めてより
十二年、その前は物心ついた時から修行の毎
日だった。そして今も剣に身を捧げ続ける
いる。他の事を殺無生は知らない。

掠風竊塵は盗賊として知られている。何か
を盗むのに邪魔だった者を相手にして欲しい、

詰まりは自分の代わりに戦って欲しい、というのが最初の依頼だったが、その一件が長引いた。単に相手が遠方にいたというのもあるが、なかなか影を踏めなかった事もあり、探索行だけで一年が過ぎた。

その間も給金は掠風竊塵から支払われた。期間契約で雇われたような形になり、道場破りで金子を稼ぐよりも効率が良かった事から、殺無生はむしろ好都合とさえ思うようになり、次第に心も通じほぐれてきた。

元来、殺無生は話し好きな性分でもある。修行時代は剣の術理など話し始めると同輩が呆れ果てるほど次から次へと話を変え、語り続けたほどだ。だから話し相手がいるというのは殺無生にとっては（本人は頑として認めないだろうが）有り難かったし、掠風竊塵もまた博識にかけては他に類を見ないほどであったから、夜通し語り続けても飽きない有様になっていた。

腕試しに他流派の門を叩きその道場主を殺す事で決着してきた。そういう人間が、剣士

が無言で陰気でなくてはならない道理もないが、次第にそうになっていく傾向が高いのは確かだ。殺無生とて、無邪気に「剣の道とは」などと語っていた頃に比べれば酷く陰気くさくなってしまうている。

掠風竊塵と旅して三年。その間、身を守る為という理由の他に他人を殺した事は一度で一人でしかない。年に十数人も殺していた頃に比べれば、最早、足を洗ったような気分にならなっていた。

路銀や賃金の感覚も、掠風竊塵に任せきりになってしまい、衣食が足りてしまっていたが故に、殺無生は近頃、礼節をふと考えるようになってしまった。

他人を、誰かを殺す事で決着とするのは、自らが収めた剣技の使い道として当たり前だと思っていた。剣の道など突き詰めればどうやって他人を殺すかという浅ましく愚かな話でしかない。死を以てしてそれを証す。殺無生の師はそれのみではないと説いたが、どんな厳しい修行にも甘んじた殺無生もそれだけは

納得しなかった。そして袂を分かった。

それのみでなければ、他に何かがあるというのか。生きる哲学でも学びたければ僧籍にでも入れればいい。学び得た知識を生かしたいのなら科挙でも目指せばいい。剣は誰かを殺す為だけの道具でしかないというのが殺無生の揺るがぬ信念でもあった。

殺無生の憂いは、その剣理をある程度、自分の中で極めてしまった事から生じた。

動ける、斬れる、斃せる、殺せる、そうなってしまうと学びがなくなる。使い道は他流派に挑んで自らも死を賭した検算をし続ける事にしか見出せない。何処ぞの兵士になるという手もあったが、殺無生の剣理は己一人の物であって初めて生きるのもあって、集団戦で矛を並べるやり方はまず性に合わないと感じていた。

どうしても惰性が生じる。時折、手強い相手などと戦うと気も晴れるが、すぐにまた気が重くなる。どうでもいい相手だと分かっていたら、剣士を名乗るに有らずとばかりに斬り捨てた。剣の道など、所詮は死ぬか殺されるかな

のだ。相手を殺そうとするならば自らも殺されるのだという覚悟がないなら剣士を名乗らなければいい。勝利する自分しか夢想できぬのならば未熟で三流もいいところだ。

だがその気になれる相手をやっと見つけても、やはり勝つ。やはり死ぬのは相手だ。

正直な話を殺無生に言わせれば、その有様に飽きていて倦んでいたと言うだろう。

その正直な話をふと、掠風竊塵に話してしまったのが、やはり半年ほど前の事だった。掠風竊塵を掠と呼び始めた後の話であった。用心棒代わりに同行し続けていた。とにかく敵には事欠かないという掠風竊塵を守ってやるのは、殺無生にとって良い気晴らしになった。人生の彩りに変化が生まれたと言っている。

「……真っ当な剣士になる気はないのかね、君は」

宿場で酒も回った頃合いで、殺無生はそう問われたが、返す言葉は決まっていた。

「俺のこの有り様が真っ当な剣士という物だ」

「だが君の名は酷く汚れた形で世に出回っている」

「仕方があるまい。何せ「殺無生」だ。何処で誰が聞いたって汚れて聞こえるだろう、よ」

「何故、君の親はそのような名を付けたかな？」

「さて。俺も生まれたばかりの記憶は、ない。そして捨てられたのだから、親に訊くという機会も、ない」

「……その話は初めて耳にしたが興味深い」

「言わなかったかな、そう言えば」

そして殺無生は、己の顔に眼帯状に巻かれた、網の目の大きな金属の飾りを指して掠風竊塵に苦笑いを投げかけて見せた。

「……これは、俺を育ててくれた師が、赤子だった俺に巻いてくれていた物の名残だ」

「ほう、てっきり風雅な装いかと」

「まあ今となっては要らぬのだが、ずっと巻いていた物で、な。捨てられた赤子の俺は頭蓋骨が割られ死にかけていたそうさ。実の父が俺を投げ捨てて、割ったそうさ」

「よく生きていたものだね」

「そこで死なぬ物だから父は動揺したのだろう、よ。凡人は一度ばかり無茶はするが立て続けに二度は出来ん。困った父は、俺を悪鬼羅刹の類として、当時剣聖の名高かった師に誅滅願うと書をしたためて道場の前に捨てた……との話だが、まあ何処まで本当かは知らぬ。知らぬが、俺はそれで構わない」

「しかし何故、君の実父はそのような行いを？」

「まあこれも聞いた話になるが、俺の親はどうもとても裕福な家で、商家か貴族かそれは知らぬが、俺は待ち望まれていた跡継ぎだったらしい。ところがだ、俺が産まれるというその日に、鳥が鳴いたそうだ」

「鳥とは？」

「邪鳥鬼鳥の類が不吉な鳴き声をぎゃあぎゃあといつまでも鳴らしていたと」

「……邪鳥……鬼鳥の鳴き声とは、それはさぞかし不気味ではあろうね」

「その中で俺が産まれた時、母が死んだ。珍しい事でもなかろうが、何せ客が客だ。産婆は自分がしくじった事で、裕福な家に咎め立て

られるのを恐れ助手に責任をなすりつけ、口喧嘩が殺し合いにまで発展した。笑える話ではないか、掠？」

「随分迷惑な鳥もいた物だな」

「その場にいた数名は殺し合って全員死んだ。騒ぎを聞きつけて駆けつけた父が見た物は、邪鳥鬼鳥の鳴き声が鳴り止まぬ中、血塗れで声を立てて泣いていた、赤子の俺だったそう。まあ正気を失っても仕方あるまい」

「許しているのか、君は。その父を」

「さあ。正直に言って他人事としか思えん。この顔飾りもあって当たり前だと思っていた歳で聞かされた話だ。「この者殺無生なる悪鬼羅刹なり」とかいう文まで見せられたが、赤子のうちから随分買いかぶられたと笑っただけだ」

そう話しているうちに酒が進む。口数も増える。

殺無生には自分の話している事が何処まで聞いた事で、何処からが自分の想像なのかも分からなくなっていたし、元より、自分の出自

などどうでも良かったから気にはしなかった。だが何故こんな話をしているのかなと気にはなっていた。

掠風竊塵という男と話していると、時折こういう気持ちになる。財布の中身を開いて見せてしまっているような感覚。自分は今これだけの金子を持っているのだと、いつの間にかさらけ出してしまう。

「……それで何故こんな話をしていたのだったか、な」

「真っ当な剣士にはならんのか、という話題だよ」

「殺無生などという名前の人間が他の何になれるというのだ？ それに俺は俺のこの有り様こそが剣士の姿だと言ったではないか」

「それはそれで一つの答えであろうし、また君が辿り着いた真理であろう事も否定はしないよ。しかしだね、君は生憎、まだ若い」

「若いという歳でもないが、な」

「いやいや、仮に百まで生きると想像してみたまえよ。これから先、無生、君は検算しながら

ら生きていくはめになってしまうのだ、よ。それはとても生き甲斐とまではなり得ない代物ではないかね」

「仕方あるまい」

「何、物事というのは見方や考え方、捉え方で如何様にも変わってしまう。真理の反対側に別の真理が隠れているという事もある。どちらも正しい。が、どちらを選ぶのかという楽しみがそこに生じる。それは三つにも四つにも増えていく事だってある」

「……掠、お前は変わった考え方をするのだな」

「どうせこの世に生まれついたのだから、いずれ死す時まで楽しみ方を模索する方が楽しかろうと思うのだが、そんなに変わっているかね？」

「それは折角辿り着いた真理を手放してしまうという事だろう。普通、人はそういう贅沢な生き方など出来んのだ」

「君が老境にも差し掛かっているというなら私だってこんな話はせんさ」

視線を逸らして、殺無生は盃に酒を注ぐ。

掠風竊塵と目を合わせ続けていると、全てを吸い取られて操られているような錯覚を覚える。そしてその感覚を危険だとは思わなかった。きっと心を許せるというのはこんな感覚なのだろうと思っていた。

「……それで？ 俺が真っ当な剣士になるというのはどんな有様だ？」

「そうだね、仮定の話と断っておいた上で考えるなら、まず金を稼ぐ事だ。金がなければ何も始まらない……がそれは私が何処ぞから盗んでくればそれで済む」

「盗んだ金で始める事の何が真っ当なのだ？」

「盗むのは私だが遣うのは君だ。問題ない。それに世の中にはただ溜め込まれただけでいつまでも遣われない銭も数多い。それを少しずつ拝借して回るのはむしろ世の為だ」

「……どういう理屈だ。酔いすぎではないのか、掠」

「まあ待ってくれ。とにかく金はある、としよう」

「分かった。それで？」

「そうだな、道場を開くというのはどうかな？」

「道場？ 俺がか？」

「そうだよ。そして弟子を募り謝礼を得て生活する。時には捨てられた赤子などの面倒も見る。厄介なよそ者がやってくれば皆の為に追い払う。……どうかな、そういうのも真っ当な剣士の姿ではないかと思うのだが、ね」

「バカを言え。俺が道場など開いて何を教える？ 大体、誰が何を俺に訊きたがる？」

「剣の術理を。君が今持っている真理を皆に伝える」

「俺は宗教を始める心算はないぞ」

「宗教に形はなかろうが、剣の術理には形がある。君はそれを誰よりも詳しく誰よりも己自身で確認し確信している。それを皆に広める事は、実にくっきりとした形ある行いだと思うが、ね」

「……掠、お前は肝心な事を忘れてる」

「何か見落としがあったかな？」

「殺無生などと名乗っている男が道場を開いて誰が門を叩くというのだ」

「ああ、その事か」

些末な話だと言わんばかりに掠風竊塵は微笑んだ。酒に酔っている様子はない。が、殺無生を丸め込むのだという熱意には酔いしれていた。元より酒の席だ。何をどう丸め込まれようと、一晚寝てしまえば、起きた頃には何もかもなかった事になってしまう。

「名前など勝手に変えてしまえばいいのだ、よ」
「俺が勝手に変えた所で、人が俺を殺無生と呼ぶのまでは変えられん」

「それを変えてしまう妙案がある」

「……この際だから言っておくが、お前の妙案とやらは終わってみると、いつも俺が苦勞する事が多かった気がするんだが、な」

「いやいや、私だって君と似たような苦勞をいつもしているよ？ 互いの気苦勞など見せて比べあえる事ではないからそう思ってしまうだけだ」

「で、妙案とは？」

「君は殺無生の名で悪名を轟かせすぎた。だから今度は違う名で名誉ある行いをすればいいのではないかね？ そうすれば君は名を捨

てられる。違う名で、人生の違う側面から、また新たな真理を模索する事だって可能だよ」「新たな名前か」

どうもそれは違う、という違和感を殺無生は覚えないでもない。名前とは、仮に二つ名であっても自分から名乗る物ではなく他人から勝手に呼ばれるという理不尽さを持つ物ではないかと考えている。そこだけは意のままにならないのが人生ではないか。

「……考えたのだがね、無生。君の名は邪鳥鬼鳥の鳴き喚く中で生まれそう名付けられた。だから次はもっと高貴な鳥に鳴かせてはどうかと思うのだが」

「例えば」

「そうだな、鳳あたりに。あれは滅多に鳴かぬぞ」

「聞いてきたように言うのだな」

「一度だけある。本当にたまに鳴くのだ。そしてその鳴き声が聞こえた時だけ、剣を振るう。これこそ剣士の奥ゆかしさという物ではないかね？」

「苦笑いしか出ぬな。俺が自分でそう言い出したらお前は笑いを堪え切れんだろう」

「が、生憎、これは私が言い出した事でね。気恥ずかしさは忘れていい」

「鳳が鳴く時だけ人を斬るのが真理か？ 鳴かぬ時でも剣は抜かねばならんだろう」

「何、鳴かぬなら鳴かせてしまえば良いのだ」

勝手な事を言う。きっと自分も掠風竊塵も酔いすぎているのだ。殺無生は特に反論する事もなく、何一つ気にしておらず、こうして酒でも飲みながら誰かとくだらない話をするのも楽しいのだという、剣士としての真理とはまた違う真理も悟っている。

メイホウケツサツ

鳴鳳決殺。

その通り名は主に、掠風竊塵が触れ回り、膾炙されていく事となる。

それは後に一年余りで野火のように広がった。

そもそもこの技会は三〇余名の参加者に寄る「^{けんせい}剣聖位」の争奪戦であった。

純粹な剣技のみを総当たり戦にて競い比べ合う。最も多く勝った者が剣の頂とも言い憚って構わない剣聖の号を自認し他称される事となる。

伝統として勝ち上がり戦ではない。

それは剣技という物が、その日その時の、遣い手の体調や感情、時の運と言った物に左右されてしまうからである。勝ち上がり戦では剣技そのものの比べ合いという趣旨に添わなくなる、というのがこの数百年以上続いているという大会の趣旨である。

基本的に剣技そのものを比べ合うのであるから、細かな縛りはある。例えば勁の使用に関しては自分に向けての内勁は許されるが相手へ対しての外勁は反則となる。ここは妖術魔術の品評会ではないからだ。

またこれは審査員の判断に寄る場合が大きい。当て身や投げ、極めなどでの決着もこれまた反則となる。薙ぎからの回し蹴り、鏢

迫り合いからの当て身など、剣理の中に混ぜている分には許されるが、最後には剣にて決着を着けるべしという決まりとなっている。だが場の勢いと趨勢にも左右され、審査によってはそれも良しとなる事もあり、非常に曖昧な決着が時折、決定される。

そして最後に、勝敗の決定についてだが、基本的には「降参」と意思表示をすればそれで良いが、誇り高い剣士の中にはそれを認めない者も多い。総当たり戦が採用されているのにはそれも大きな要因である。

つまり、自分に言い訳が出来る。

今日は調子が悪かった、次にやれば違う、という言い訳があり、尚かつ実際、別の相手とは言え次がある。これはあたら剣士らに命を散らせないよう、新たな修行を積み尚、上を目指して欲しいという開催者側の意図もある。

とは言えどうしても負けを認めない場合は、それは死を以て決着するしかない。

剣を執り剣で相手を仕留める目的で術理を

磨いてきた者たちなのだ。

掠風竊塵に言わせれば「死んで殺されてそれが本望」という連中なのだ。

度し難いと掠風竊塵は言った。たかが剣技に命を賭けようという痴れ者の集まりだ。不意の矢で死んだとしても満足して貰うしかない。彼らは戦いという物にそれだけの価値を見いだしているのだろうから。

また今大会は時間制限はきっちり半日という長時間である事も特徴である。過去には半日、剣を持ったまま一步も動かず睨み合い、刻限直前で一方がそのまま気を失い勝敗が決したという例もある。

これこそが剣技の研鑽であろうと主催者側は考えている。

外勁を許してしまうと、剣技そのものを比べあえなくなってしまうのだ。強引に突っ込んでいけてしまうし、そうなると剣が槍でも木刀でも構わないではないか、という結論にさえ至ってしまい「剣技會」の名が相応しくなくなってしまう。

で、あるからこの大会は剣名を上げるという意味においては権威としての後ろ盾が尋常ではなく強固な物となる。

剣聖の位の後ろ盾となる。

まず間違いなく一点の曇りもない、名誉ある剣の遣い手として認知される事となる。

「……殺無生の悪名が霞んで消える事は間違いあるまいよ」

などと掠風竊塵がほくそ笑んだのさえ、殺無生には他人事のような気がした。気がついたらいつの間にか参加するはめになっていた。ふざけるなど言いたくなかったが、掠風竊塵はいつもの調子で丸め込み、殺無生も自ら同意したような感覚に陥っていた。

「断っておくが、俺は別にこれで優勝したからと言って道場など開かんぞ」

「……まあ君が何を言おうと世の人々は君を褒め称えるのだが、ね」

「居心地の悪い限りだな」

「最初はみなそうだ。じきに馴れる。そして新しい真理を、得る」

どうも何かしら騙されているといった感覚は殺無生の中にあっただが、それはやはり危険視するほどの物ではなく、友達にからかわれているといった程度の物でしかなかった。闇社会でその名の知れた殺無生が、表をのうのうと歩いて皆に賞賛の眼差しを受けるという光景は、想像しただけで殺無生に取っては笑話で、きっと掠風竊塵も俺を笑いたいのだろう、としか思っていなかったし、それが楽しいというならそうさせてやろうとも考えていた。

そしてその居心地の悪い景色にも、ひよっとしたら何かしらの得る物はあるかも知れないという微かな期待も、殺無生は自覚こそしていなかったが、その胸の内に潜ませてはいた。別に好きで選んで殺無生という人間になった訳ではない。親にそう名付けられそう育ち、こうなった。そこには幾つかの選択肢は確かにあったが、どれをどう選んだ所で、そう変わりはなかっただろう。

掠風竊塵は、新しい名前と新しい生き様を示してくれたのだ。

これは殺無生一人では決して為し得なかった事である。それを自覚しているからこそ、殺無生は言葉にしないまでも感謝している。自分の陰鬱な人生に差し込んできた光であったと考えている。

とは言えそれもこれも、この劍技會で優勝すればの話である。

不意打ちも計略も外勁もなく、劍技のみでの凌ぎ合_{とうり}いである。

そして東離の地から自信と裏付けを持って並々ならぬ劍士が死をも厭わず集結する。殺無生は自身の劍理に何一つ隙はなく誰を相手にしようと退かねばならぬ局面になろうとは思っていないが、それでも自身が東離で最強の劍士であると吹聴できるほどには慢心していない。

故に、挑み甲斐はある。殊の外、あった。

それはこの大会が、数百年の歴史に置いて今まさに変化しているからでもある。かつて数多の劍士によって争奪戦が繰り返されたこの大会は劍聖會けんせいかいと呼ばれていたが、今や

けんえいかい
「劍英會」と呼ばれている。

誰も勝てないからである。

劍聖の位は四年に一度のこの大会で、悉く同じ人間がもぎ取っていき、もはや彼の者の称号でしかなくなっていた。歳経るごとに敗数は減り遂には百戦百勝という有様を出来させ、遂には永世劍聖位と呼ばれる事となる。

名を鐵^{テツキセン}笛仙という。

彼の者は殺無生がこの世に生まれ落ちた時には既に劍聖であり、今もまだそうである。その命がやがて常命の理において召されるその瞬間までそうであろうと誰もに言わしめた、この劍技會の歴史における変革者。

今や参加者を審議する審判団の最高位であり、だから誰も、鐵笛仙から手渡される称号を劍聖などとは自称できなくなり、いつしか「劍英」などという名で曖昧に収まってしまっている。過去に二度、鐵笛仙自らと手合わせ願うと申し出た者もいたが、それを鐵笛仙は二度とも了承し、後日万事整えた上で、見事に下している。老いよる鈍りなど微塵もない。

剣の王である。それが鐵笛仙という男である。

かつての殺無生の師であった。剣に対する理の違いから袂を分かった相手である。

殺無生はだからこそ、この大会の控え室にいる。

慢心ではなく確固たる裏付けがあつての「無双」であり「最強」を示す剣聖になれる。今、その名を恣にしている相手に言い切れる。そしてそれは殺無生の剣理において、これ以上ないほどの検算となつて真理を確たる物にしてくれる事でもある。

剣の道とは、などと青臭く語っていた頃を思い出す。

これほどすれてしまった自分がもう一度その問いかけを、他ならぬ育ての親、剣の師である鐵笛仙その人に投げかけられるのである。若かりし頃の自分を正しかったと肯んじ得る機会などそうそうある物ではない。

酔っていたし、高鳴ってもいたが油断はしなかった。甘く見てもいなかった。だが殺無

生は控え室にいながらにして、誰と一合もまだ合わせぬうちから、高揚していた。

どうするのだと。

本当にいいのかと。

勝ってしまうぞ、俺はと。あの剣聖にすら勝つてしまえるのではないかと。

まだ控え室でそういう思いを確信と共に仄かに過ぎらせてしまうのだ。

この十四年という月日を剣に捧げたからこそ、そう思える。思ってしまう。

これは控え室とは言うが、実際は隔離室である。

この闘技場は元々は監獄であるし今もそうだ。参加者の半数は死罪を言い渡された極悪人である。それらが剣技にて礼節を弁えた振る舞いをするなら罪一等を減じようとも確約されている。

総当たりではあるが次の対戦相手は事前に知らされない。そもそも誰が参加しているのかさえ伝えられていない。他人の戦いを観察も出来ない。そうでなければ順番が後になる